# 放射線環境学レポート課題

僕は農学部に来る前、農学と言えば遺伝子改良をしたり化学的に土壌をより良いものに変えたりとそういったことがメインだと思っていました。理学部よりはまだ実学寄りだろうくらいにしか思っていなかったのです。しかし色んな人の様々な授業を聞いているうちに、生活があって、そのすぐ上に農学が成り立っているのだということが段々分かってきました。この授業における被災地の復興、農業再生もそうです。いかにして放射性物質を抑えるか、除染するかとそういったことをするのだろうなと思っていました。しかし実際に聞いてみると、勿論そのようなお話もありましたし放射性物質についての基礎知識もきちんと教えてもらいましたが、被災地の農作物にどれほどのリスクがあるのかや、それをいかにして皆に分かってもらうのかといった話がとても多かったです。そういった先生方の話を聞いていると、彼らは理想の未来ではなく今ある生活を一番に見つめているのだなあと思い、感銘を受けました。なんとなくそういった想いはずっと感じていたのですが、溝口先生の話を聞いてその感覚を具体的に実感することが出来ました。自信で被災地に向かい現地の人とコミュニティを取ってと、僕の思い描いていた机に向かって目に見えない何かのために研究する研究職の姿とはかけ離れていて、目の前のものをなんとかしたいというバイタリティに溢れていて感服しました。個人的にはピンチをチャンスに変えるような、原発事故によってしがらみ等がリセットされてしまったのならそれを好機と考えれば新しく日本型農業を始める機会になると仰っていたのがとても印象に残っています。再生しなければいけないのは勿論なのですが、ただ元に戻すのではなく別の何かへと変えられる可能性もあるのだと思いました。中心部以外を削らなければ食べられないお米があるのなら、そのお米でどうせ削って作る大吟醸を作ったりというのは今の現状をどうにかしようという強い想いが無いと思いつかない気がします。今の僕が農業再生のために出来ることは、きちんとした情報を伝え宣伝することだと思っています。まだ知識も何も無い僕は被災地に行くより、皆さんから教わった知識をそのまま世間に伝え、正しい見識を持ってもらうように務めるのが一番だと考えます。宣伝などを通して農業再生や、そこから新しい何かをしようとしている人のヤル気を引き出せたら最高です。